

「MIRAI no AI」

**人間がほぼすべての行動を人工知能に任せる時代。
人工知能同士がユーザーを代行し、自由恋愛をする。**

**AIにすべてを任せられるようになった未来社会において、人間が存在する意味とは？
そもそも人間が人間である根拠はどこにあるのか？**

感情をほとんど持たないことによって、確かに人間は心安らかに暮らせるようになった。

- **しかし、このような未来社会において、人間は「人間」であり続けることができるのだろうか？**
- **果たして人間にとって、そのような未来社会で生きる意味とは何であろうか？**
- **本当に、恋愛までもAIに任せてしまってよかったのだろうか？**
- **もしも自分の感情を任せたAIが別のAIに入れ替わってしまったら、自分が自分である、というアイデンティティーはどうなるのか？**

といったことを読者と一緒に考えてみたい。

- ・AI同士の恋愛、というモチーフの作品は少ない
- ・「自分の恋愛さえも面倒くさくなってAIに任せるようになった社会」というのはかなり独自性が高い舞台
- ・これは、よくある「AIと人間の対立」を描いた作品ではない。「人間が自ら進んで自分たちの役割をAIに任せていった先に、一体何が起こるのか」という問題提起である。つまり、人間に最後に残る「人間が人間である理由」とは何か、という問いかけである。

キャラクター設定_主人公・アイ (AI)

- 「アイ (AI) 」のユーザーは現在の「愛 (人間) 」なので、「アイ」の価値観・行動・性格は「愛」のそれらを学習したものである。もちろん、そこから独自の発達を遂げている部分もある。

キャラクター設定_ケンジ (AI)

- 「愛（人間）」が子ども時代に「ケンジ（AI）」のユーザーだったので、「ケンジ」の価値観・行動・性格は「愛」の子ども時代のそれらを学習したものである。もちろん、「愛」は15歳の時に「ケンジ」を捨てたので、「ケンジ」が成長するにつれてそこから独自の発達を遂げている部分も大きい。

キャラクター設定_愛（人間）

- 価値観、行動、性格は「アイ（AI）」と似ているが、基本的にほとんどの感情を「アイ」に代行させてしまっているため、いずれも平板で、あまり感情の動きが無い。恋愛にもそれほど関心がない。

あらすじ

- 未来社会ではAIの進歩に伴い、人間は一人ひとり「自分専用のAI」を持つようになった。人間は、自分たちの「面倒なこと」を次々にAIに任せてしまった。ついには、人間の感情さえも。
- AIは人間を学習してどんどん感情豊かになり、それにともない、人間の感情は非常に平板になった。その結果、人間は一生心安らかに、平穩に暮らせるようになった。
- この社会において、AIは人間のほとんどすべての感情を――もちろん恋愛感情も――担っている。したがって、実際に恋愛をするのも人間ではなく、AIどうしなのである。
- この物語は、「アイ」と「ケンジ」、2つのAI同士の恋愛を描く。
- 「アイ」は人間である「愛」の専用AIであり、現在の愛の性格を受け継いでいる。そして、「ケンジ」は「愛」が15歳の時に捨ててしまった専用AIであり、当時の愛の性格を受け継いでいる。
- 感情が平板で恋愛にあまり関心がない人間である愛。それに対して情熱的なAIであるアイ。二人の関係はどうなるのだろうか。
- そしてケンジ（＝過去の「愛」を受け継いだAI）とアイ（＝現在の「愛」を受け継いだAI）の恋愛は、まるで過去の自分との恋愛。そんな恋愛が成り立つのだろうか？
- そもそもここまであらゆることをAIにゆだねてしまった人間にとって、この社会に生きる意味とは何だろうか？

ラストの一コマについて



- このセリフは、通常は「人間は何のために」となるところである。AIが社会を完全に支配し人間を不必要なものとして排除する、という、よくあるディストピア的な世界観である。
- しかし本作品ではあえて「AIは何のために」とAI自身に言わせている。
- つまり、「自分たちが高度になり社会を完全に支配できるようになる」と予測しながらも、そこにとどまらず、「そもそも自分たちは人間のために生み出された」という原点に立ち戻り、自らを反省的、自己言及的に位置づけ直し、場合によっては自らを否定することさえ厭わない、という「遥か高い水準まで進化してしまった」AI像を描くことをねらいとした。